

特別講演 1

「脳梗塞治療における抗凝固療法の新たな展開」

福井大学医学部 地域医療推進講座 講師

山村 修 先生

心原性脳塞栓症(以下 CES)の一次・二次予防における経口抗凝固療法の有用性は、1990年代に発表された数多くの研究によって確立しました。この時代の研究はビタミン K 拮抗薬であるワルファリンを中心に行われ、プロトロンビン時間国際標準比 (PT-INR) を目安とした至適治療域の設定や、CHADS2 score などリスク評価に基づく導入基準が示されました。ワルファリンは CES 予防の第一選択薬として国内外のガイドラインに記載されましたが、治療域を維持することの難しさが足かせとなり、国内全体に十分に浸透しているとは言えません。一方、2000年代には抗トロンビン薬や Xa 阻害薬など新たな経口抗凝固薬の開発が進み、臨床試験が繰り返されました。2010年代は、これら新薬が投入され、CES 予防は経口抗凝固薬を選択する時代に代わります。各薬剤の投与量、投与回数、作用時間、出血を含む副作用のリスク、コストなど各薬剤の特徴を知り、患者さんの背景に合わせて選択することが求められています。